
ポケモンレンジャー物語 2

タイムボカン好きとヤッターマン 3号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモンレンジャー物語2

【Nコード】

N5310L

【作者名】

タイムボカン好きとヤッターマン3号

【あらすじ】

平和が訪れたオブリア地方に新たな事件が発生したミナミとナツヤはオブリア地方へと向かうカヅキとヒナタそしてハジメにヒトミも参戦し新たな幕開けをしていた

三匹の異変

ミナミ「キャプチャ・オン」

あざやかにキャプチャをしたミナミ一時期性格は悪かったが少しずつ良くなっていくパートナーはウクレレピチユー

ヒナタ「ナアイス」

この人はミナミの先輩にあたるヒナタ水色の髪でとても優しいミナミあこがれの先輩パートナーはプラスル

ミナミ「ありがとうございます」

ナツヤ「前よりまともになったじゃん」

ナツヤはミナミの同僚超前向きでミナミは下見している

ミナミ「な・・・なによまともって・・・よっぽど悪いみたいじゃない！！アタシは仮にもレンジャーよ」

カヅキ「まあまあ・・・ケンカしないで」

マイナンをつれていているレンジャーヒナタと同僚青色の髪色をする

ヒトミ「あーあせつかくレンジャーが集まったのにヒマじゃなあ・・・つまらない」

変わり者のトップレンジャーのヒトミヒナタの後輩ミナミの先輩にあたるパチリスをパートナーにする

ハジメ「何言ってるんだよレンジャーはヒマが1番だろ」

ヒトミの同僚でトップレンジャーただ1人パートナージスタイラーを持つムツクルがパートナー

シンバラ「おっ集まったな」

全員「教授」

シンバラ「最近オブリア全体であやしい動きをするものがあるらしい・・・調べてくれ」

とてもせっかちな教授でも慕われる

全員「了解」

そして六人のレンジャーはムクホークで空に飛び立った

ミナミ「懐かしいねナツヤここで三人組とレッドアイと出会って打ち落とされただけ？」

ナツヤ「そうだね」

レル「わあああああつセメントなんかするんだよ！！」

ダダフライに乗ったスタイル抜群で身だしなみが整えてある女性が逃げさるかのように横切った抱きかかえてるマナフィはおびえていた

セメント「ま・・・待ってくださいいいいいレル様あああつ」

叫びながら頼りなさそうな男性がダダフライで逃げ去った

ドガイ「そんなに影薄いまんねー！ーん」

問い掛けるかのように遅れて太った男性が去っていく・・・どうやら体重のせいでダダフライが壊れているらしい

ミナミ「今は・・・三人組・・・ナツパーズ三人組よねナツヤ」

ナツヤ「ああ」

ヒナタ「危ない」

ヒナタがそう言った瞬間サンダーとファイヤーとフリーザーが興奮しながら飛び回った

カヅキ「様子がおかしいぞ」

レッドアイ「待て」

赤い髪交じりの美形の男性が三匹のポケモンを追っていた

ミナミ「レッドアイ!!」

レッドアイ「レルの奴・・・オレを庇って襲われやがった自分達の実力が低いのに気づいてないのか!??」

ナツヤ「一体何があつたんだ?」

レッドアイ「どうやら・・・黄金のヨロイカブトが影響下かもしれないが・・・このままでは三人が危ない」

ヒトミ「来た来たあああ!!ミッション」

何故かヒトミはミッションになるとテンションが上がった

ナツヤ「よおし」

するとキャプチャディスクを打ち放ちキャプチャを心見るが・・・

ファイヤー「フアアアアイ」

ナツヤ「ダメだ早すぎる」

ミナミ「一度着地よ」

シンバラ「なんと!?!」

ヒトミ「このままじゃ犠牲を出しかねない・・・教授」

シンバラ「わかった・・・いくら昔の悪人とはいえ助けるのがレンジャーじゃ」

全員「了解」

シンバラ「ふたてに別れるヒナタとカツキはサンダーをハジメとヒトミはフリーザーをミナミとナツヤはファイヤを頼む」

全員「了解」

ヒナタ「この・・・山に・・・サンダーが」

カヅキ「うひゃ雷が・・・」

ヒナタ「あっゴローンだ相性バツチりねキャプチャ・オン」
ラインが引かれぐるぐる囲む

ヒナタ「はあああああ!!」
周りが輝いた

カヅキ「ライボルトだ充電に・・・キャプチャ・オン」
同じ事が行われた

カヅキ「OKいこうぜ」

奥地へ向かうと・・・

ドガイ「助けてくれやー」

太った体型の男性がサンダーに捕まった

ドガイ「ナレーターさんあんまり恥ずかしいこといわんでくれまんねん」

ヒナタ「今助けますねキャプチャ・オン」
ラインが引かれ・・・

ヒナタ「はあああああ！！！！」

カツキ「ヒナタの奴・・・さつきより熱気が違うな」
キャプチャは成功したかに思われた・・・しかし

サンダー「さーーーーーあーーーーんーーーーっ」
電撃が放つ

ヒナタ「やっぱりポケアシストなしでのキャプチャは無理ね・・・」
ゴローン「がんせきふうじ」
岩が下から真つ直ぐ伸びサンダーの動きを封じた

ヒナタ「もう確実ねキャプチャ・オン」
そしてキャプチャをするが・・・
バチイイイイイッ

ヒナタ「え・・・」

カツキ「危ない！！ヒナタ！！」
電撃で岩が砕かれヒナタへと命中した

ヒナタ「きゃああああ！！！！」

プラスル「ぷらあ!!」

衝撃でプラスルは吹っ飛んだそしてドガイの顔面を直撃した

カヅキ「あつ・・・大丈・・・」

しかし周りに電撃を放つ

カヅキ「これじゃあキャプチャラインが引けない・・・」

ヒナタ「どうする?」

カヅキ「サンダーは伝説のポケモンだオレもゴローンをキャプチャした・・・ただ奴は強すぎる・・・あのヨロイカブトによって興奮してる・・・周りのポケモンも様子が変だった・・・きつとあれが・・・ポケモンを苦しめるなら・・・」

するとカヅキはヨロイカブト向かって走り出した

ヒナタ「カヅキイ!!」

カヅキ「うおおおっ」

回収に成功した・・・しかし

ドオオオオオツン

雷の直撃を浴びた

ヒナタ「カヅキイイイイ!!」

それは違った・・・ドガイだった持ち前の不死身で助かっていた

ドガイ「・・・黒焦げになることはなれてるまんねん」

カヅキ「壊したキャプチャは楽になるはず・・・ゴローン!!」

がんせきふうじ」「

ドドドドッ

岩が突き出した

ヒナタ「行くわよ！！キャプチャ・オン」

ラインが引かれる

ヒナタ「お願い・・・サンダー・・・はあああああ！！！！」

キャプチャは成功した・・・その瞬間ヒナタは安心して座り込んだ

ヒナタ「ハア・・・ハア・・・ハア・・・」

カヅキ「よしっ・・・大丈夫ですか？帰りましょう」

ドガイ「あー親切まんねんレル様にずっとこきつかれて大変だったまんねん・・・こんな親切な人にめぐり合えて幸せまんねん」

ドガイはずっと感動していた

カヅキ「あ・・・あの」

ヒトミ「よおおおし助けてあげる」

吹雪が舞う中情熱的なヒトミは叫ぶ

ハジメ「もつと緊張感持てよ・・・おっキュウコンだ・・・キャ
プチャ・オン」

キャプチャを成功させた・・・ほんの数秒でこれがバトナージスタ
イラーの効果である

ヒトミ「さあ行くわよ」

セメント「あーあーあーそのかわいこちゃん助けて」

ヒトミ「そうねえ！！このアタシにまかせなさいっ！！キャプチャ・
オン」

ラインを引きぐるぐる囲む

ヒトミ「楽勝ね・・・終りよ」

しかしフリーザーは吹雪を放ち派手リスとヒトミを吹き飛ばしたそ
してガケっぷちにたたされた

ヒトミ「くっ・・・」

ヒトミが下を見ると落ちたらもう一生の終りがわかる高さだった

ハジメ「ヒトミ」

フリーザーはヒトミを見つめトドメをさそつとしていた

ハジメ「ヒトミィィィィィィ」

黄金のヨロイカフト

ヒトミ「く……うっ」

ヒトミは一生の終りを覚悟した……。フリーザーは確実にしとめようと強力な攻撃を仕掛けようとするため放つのに時間がかかった

ハジメ「くっ……。モウカザル」ほのおのうず」
炎に閉じ込め攻撃を防ごうとする

ハジメ「ヒトミ……！」

ヒトミ「う……。登れない……。ハジメ……！」

ハジメ「ムツクル手助けをしてやれ」

しかしフリーザーの吹雪はハジメとムツクルを凍りつかせ手足を封じる

ハジメ「くっ……。ヒトミ……！ポケアシスト……。なんでもいい」

ヒトミ「え……。ああ……。わかった……。ユキカブリ」はっば力
ツター」

ババババツ

ハジメ「さあスキができた……。キャプチャ・オン」

フリーザーの周りにラインが引かれぐるぐると回る

ヒトミ「ど……。どうして……。氷を跳ね飛ばし……。ハツ……。
バトナージスタイラーの七色ラインは……。勢いとパワーを備え付

けてる・・・氷なんて跳ね飛ばすのは簡単ね・・・」
すると体力が尽きたか手を放してしまう

ヒトミ「きゃああー！ー！ー！ーっ」

ハジメ「ヒトミー!!」

するとハジメは黄金のヨロイカブトを地面に叩きつけ壊しゆれを起
こしムクホークが現われる

ハジメ「キャプチャ・オン」

すぐさまキャプチャしヒトミを助ける

ヒトミ「あ・・・ああ」

するとセメントに近づき・・・

ヒトミ「アタシの活躍で助けてましたよ」

ハジメ「おーれーだーろー」

ヒトミ「いーやアタシよ」

セメント「そうです・・・ヒトミちゃんです」

ヒトミ「ほらっみなさい」

ハジメ「・・・ボイスメールナツヤくん?今」

ナツヤ「ハアハア・・・火山活動が活発すぎて・・・なかなか・・・
うわっ」

すると電源が切れた

ハジメ「あっ・・・おい！ナツヤ？」

ヒトミ「た・・・大変ーっ」

実は

ナツヤ「なんで電源切るんだよ」

ミナミ「こんな熱いのに危険なんだから油断はダメよ」

ナツヤ「うわぁ〜性格悪っ」

ミナミ「何よ!!」

相変わらずケンカをする二人

ナツヤ「絶対なんとかなる」

ミナミ「だからいやなの!!その前向きおじさんがああ!!」

ナツヤ「なっなにい」

するとウクレレはハアとため息をし音楽をかける

ポーンポロンポロンポロンポロンポロンポロン

ミナミ「あ……ごめんウクレレ」
そうした奥地へと向かう……その瞬間
ゴオオオオッ

ミナミ「今は……ファイヤー」
火炎放射をミナミにぶつけた

ミナミ「くっ……ナツヤ」

ナツヤ「ハア……ハア……すごい炎攻撃だ」

レル「あーもう早く助けるんだよスカポンタンー!!」

ミナミ「あー……助けようと思ったのに……やめようかなあ」

レル「わかったわかった」

おだてブタ「ブタもおだてりゃ木に登る」

レル「ぽぺーっ」

何故かレルのスタイラーから現われた

レル「セメントめえええええっ」

しかし容赦なく炎攻撃を放つ

マナフィ「あー!!お姉さま」

ミナミ「……」

ナツヤ「レルが・・・」

しかしいつものお約束で服がポロポロになった

レル「きゃあ！！男のレンジャー！！見るんじゃないよ」

ミナミ「アシストが必要ね・・・マナフィ！！主人を助けたいなら・・・力を貸して」

ナマフィ「・・・コクン」

するとディクスを放った

ミナミ「今よマナフィ」

マナフィはハイドロポンプを使うが飛んですぐによけられた

ミナミ「黄金のヨロイカブト」

しかし猛攻でとても近づけなかった

ミナミ「どうして！！助けたいのに・・・ポケモンも・・・お姉さんも！」

レル「！！アンタ・・・いやミナミ・・・今・・・」

ミナミ「キャプチャ・オン」

しかし炎に囲まれた

ナツヤ「ミナミ・・・うわっ」

跳ね飛ばされてしまった

ナツヤ「ハアハア・・・」

ナツヤのレンジャー制服はボロボロされとても重傷だった

ナツヤ「ゼエゼエ」

熱さから体は持ってもあと10分程度

ナツヤ「ミナミ……」

ミナミ「くっ……キャプチャ……オン」

しかしファイヤーの猛攻は収まらなかった

ミナミ「ヨロイ……カブト」

ドドドドッ

ミナミ「きゃああああ……」

レル「レンジャー……初めて会ったとき……同じ目をしてるよ……絶対救いたい守りたい……そういう目の色を……まるで光る……美しさ……これは軌跡と言ってもいい……そう……」

「光の軌跡」

ミナミ「ハアハア……ゴローニャ!!動きを止めて」
どどどどどっ

ゴオオオオッ

炎に身を焼かれミナミはほとんど意識がなかった

ミナミ「ゼエ……ゼエ……ゼエ……絶対……ゼエ……」
そして腕を振り上げ……

ミナミ「キャプチャ・オン」

最後の力を振り絞り絞りラインが引かれ成功した

ミナミ「ハアハアハア・・・やった」

そしてその場から倒れてしまった

ナツヤ「う・・・ミナミ!!」

レル「レンジャー・・・」

すると黄金のヨロイカブトは消滅した

シンバラ「三人は無事じゃたらしいタルガの家で手当てをしてる・・・
・レッドアイ・・・もっと詳しく教えてくれ」

レッドアイ「実は・・・オレはファイヤーが持つ黄金のヨロイカブ
トが強い影響をもたらしていたため回収することにしたが・・・

レッドアイ「やはり興奮」

そしてファイヤーは攻撃しようとした

レッドアイ「まずっ・・・」

するとビームを放たれた

レル「レッドアイ様」

レッドアイ「レル・・・バカなことを」
伝説の三匹が集まり三人を襲った

レル「きゃあーっ」

セメント「レル様ーっ怖いですーっ」

レル「うるさいねええっ早くアタシを助け・・・きゃあーっ」

ドガイ「ワイをおいてくなんてかげ薄い存在まんねーん」

レッドアイ「レルはそのまま・・・」

シンバラ「なるほどな・・・」

ミナミ「教授」

シンバラ「ミナミ!!」

ミナミ「大変ですっあの後・・・移動する噴火があると・・・」

シンバラ「移動する噴火じゃと？」

ナツヤ「そしてシェイミが現われて……」

レル「シェイミちゃん」

セメント「レル様……かわいいものを目にすると……」

レル「えー……なんか言ったかい？」

笑いながらそう言うがセメントはレルの隠れたイラダチを察した

セメント「いーえなんにも全然なにも」
するとドカイが遅れてやってきた

ドガイ「あー逃げられましたねレル様」

レル「ああっ飛んでいったよ」

ヒトミ「大丈夫よっアタシに任せなさいっパチリス「かみなり」」
上から攻撃するもかるやかにかわされた

レル「何やってるんだよ」

イラダチを隠せないレルは自分のスタイラーを出しディスクを放つ

レル「レンジャーサインラティオス「ラスターパッチ」」

ヒトミ「その技はダメよ自然が壊れる」
しかし気にせず放ちつづけた

ヒトミ「ムクホーク追いかけて」
しかし追いつくようなものではなかった

ハジメ「・・・」

ディスクはものすごい勢いで舞いシェイミをキャプチャする

ヒトミ「さすがハジメ」

ハジメ「かなり興奮していた・・・」

ヒトミ「えっ・・・？」

ハジメ「きつと・・・何かある」

レル「ううーん かわいい」

マナファイ「マナは？」

レル「もちろん」

セメント「私達もあーやってされたい・・・」

ドドドドッ

ヒナタ「あれが動く噴火」

カヅキ「ヒナタ危ない」

カヅキはヒナタに体当たりした

ヒナタ「きゃ・・噴火!？」

カヅキ「これじゃあ動く噴火はの位置がつかめない」

そう吐いた瞬間大きな噴火で地震が起きた

ズドドドドドッ

ヒナタ「きゃあああーっ」

マグマの割れ目にヒナタは落ちた

カヅキ「ヒナタアアアップラスルウウウ」

マイナンは震えながらカヅキの肩に乗る

ヒナタ「う・・」

ぼやけて見えないが服が紫色の男性が見られた

パープルアイ「お目覚めになりましたね」

ヒナタ「なっ・・・」

ヒナタは動揺してしまった

パープルアイ「私のヒードランの実力・・・どう感じましたか？」
つぶやく声は悪の声だった

ヒナタ「アナタが・・・ヒードランは「ふんか」を覚えないはずよ
するとパープルアイはクスツと笑う

パープルアイ「答えは簡単ですそれは生体実験」
その言葉はヒナタの怒りの心に直撃した

ヒナタ「ふ・・・ふざけないで！！ポケモンはアナタの道具じゃないのよ！！」

パープルアイ「私はミュウツを操るのに失敗した・・・だったら
ポケモンに強力な技をつければ最強の存在・・・それにはミュウの
力が必要だ・・・今そいつを探してる」

ヒナタ「ミュウ！？・・・聞いたことがある・・・すべての技を操
るポケモン」

パープルアイ「そうですミュウの力をもっと利用すれば・・・ミュ
ウツより最強な存在・・・デオキシスをしのぐ存在へと変わる・・・
そのための・・・実験台・・・」
するとヒナタは立ち上がり

ヒナタ「アンタは絶対許さない！！ポケモンはアンタの道具じゃない！！
アナタ・・・絶対・・・」

パープルアイ「ヒードラン「ふんか」」

体力満タンのヒードランの噴火が命中圧倒的な強さでヒナタのレンジャーの制服はボロボロの黒こげになり・・・

ヒナタ「ゼエゼエ・・・」

息ができなくなりその場に倒れた

カヅキ「ヒナタ！」

すると噴火が起きプラスルは飛ばされていた

カヅキ「なっ・・・」

地面が割れた

カヅキ「くっ」

マイナンは吹き飛ばされマグマに真っ逆さまだった

カヅキ「マイナン！！」

ギリギリセーフだったがヒードランの大地の力でカヅキは飛ばされた

カヅキ「ハアハア・・・ヒナタアアア！！」

声をかけてもピクリとも動かないヒナタ

カヅキ「ヒナ・・・」

その瞬間噴火が直撃した

パープルアイ「よくやりましたよ・・・ヒードラン」

パープルアイは立ち去った

ブルーアイの危機（前書き）

今日はおふざけが多いですが・・・次回はしっかりしてます

ブルーアイの危機

シンバラとハヤテの通信は誰もが予想だにしなかった言葉を放った
ハヤテ「カヅキとヒナタとの通信が取れない・・・動く噴火は各地
で起きている・・・そうこの言葉しかない・・・カヅキ達は倒された・
・・・つまりミッション失敗した・・・ということになる」

ミナミ「そんな・・・ヒナタさんが・・・」

ナツヤ「先輩達の実力は・・・確かだ」

ハジメ「不自然だ・・・シェイミがこんな所に現われるのも圧倒的
におかしい」

ヒトミ「フッフッフ・・・どうやらアタシの出番みたいね・・・
妙なテンションのヒトミは・・・推測した

ヒトミ「いくらポケモンが「ふんか」を起こしても・・・不自然よ
誰かに指示されたとしたら納得が行く・・・ただ・・・1番気がか
りなのが・・・ミナミ達やレッドアイがファイヤーを見つけに行っ
たのに何もなかった・・・ということ」

ミナミ「お姉さん・・・他に何か異常なかった？」

レル「え・・・異常・・・」

セメント「異常は異常なし・・・以上・・・なーちやて」
その寒いギャグはミナミとレルの怒りに火をつけた

覗き込みながら悲鳴をあげる

レル「……（終わった）」

するとパネマがフーズをポケモン達に差し出した

パネマ「いっぱいあから食べてね……いつかポケモンを育てる土地へ行ってみたいなあ……」

そのためのポケモンフーズをがつがつ食べるポケモン達

レイラ「遠慮はいいの……ポケモンを育てるのは大変だから……これあっても仕方ないもの」

レル「ってセメント！！いつつまで気絶してるんだよ」

一撃キックを入れた

レル「ハア……あああああっなんでアタシが……こんなことやらなきゃいけないんだよ」

すると大きな足音がした

ナツパーズA「大変ですレンジャーさん」

レル「お前達ッ」

ナツパーズA「あっ……レル様何故……」

レル「アタシ達は監禁されてるんだよ」

するとハツとナツパーズAは思い出し慌て口調で話し出す

ナツパーズA「あっ……あああなああ……えっとブルーアイが……がいがんに……閉じ込め……ででおしの引き満ちが・

・・・」

あまりにもあわてていたため噛みまくっていた

タルガ「落ち着け」

ナツパーズ「・・・ブルーアイ様が私達を庇い岩がふつてきて挟まってしまい海の底なんです」

タルガ「そうか・・・ミナミにナツヤ!!」

レル「そんなことはしなくてもいいよそんなことより自分達の先輩が心配じゃないのかい？」
するとミナミの目つきが変わった

ミナミ「じゃあお姉さんはブルーアイが心配じゃないの!？」
するとレルは真剣な眼差しで・・・

レル「・・・アタシ達をあれほどコケにした奴だよ!!そして奴は悪人だよ!!・・・だから・・・あれで罪をつくなえば・・・いい・・・ミナミ・・・レンジャー達は平和のためにやるんじゃないのかい？」

ナツパーズA「レル様・・・」

ナツパーズAにも迷いがあった・・・そして悪としてのプライドで何故レンジャーに頼るのかというプライドがあった・・・

ミナミ「じゃあ逆に聞くよ・・・何故アタシ達がお姉さんたちを助けたか・・・わかる？」

ミナミは静かに言う・・・

レル「え……」

ミナミ「そう……悪人だろうと関係ないの……助けを求め
るなら……絶対助ける!!」
するとレルは笑い……

レル「そうだったねミナミの目には誰にもない……「光の軌跡」
の目を持つんだよね……」

ミナミ「「光の軌跡」の……目？」

レル「そう……何者にも勝る輝く光の目と……軌跡とも呼べる
運を持ち合わせた……「光の軌跡」の目……」

するとレルは真面目な顔になっていった……まるで善玉……
いやそれはいいすぎか……奴に善玉という文字はない

レル「真面目に言ってるけど恥ずかしいんだけどしつかりしてよナ
レーターさんっ不陰気を壊すんじゃないよスカポントン!!」

そう言い放った時ナッパーズAは思い出すのかように大慌てで言う

ナッパーズA「そういえば酸素ボンベもう半分もなかったけ？」

タルガ「それを早く言うんだ」

ミナミ「行こうナツヤ」

ナツヤ「ああ」

ブルーアイ「ハアハア苦しい……もう終りだ……でも……
これで罪をつぐなえばいい……仲間を救えたんだ……三人
組はレンジャーが救ってくれた……愚かな罪で命を落とすのはア
タシだけで……いい……」
息が荒く酸素ボンベも薄い空気しかない

ブルーアイ「誰かに……遺言を残したかったよ……」
一生の終りを覚悟し自分へ遺言を残した

ルギア「ぎゃあああっ」

ブルーアイ「(ポケモンも怒るよね……こんなアタシが平和の海
に来たのだから……ああ早く罪をつぐないたい)」

パープルアイ「フッフッフ」

ブルーアイ「お前はッごほっ……ぐぐ……」
するとパープルアイはちょいきつめのぐるぐるまきのレッドアイを
見せた

レッドアイ「ブルーアイ!!」
レッドアイは抵抗した

パープルアイ「ルギアよ暴れまわれっ」

一方そのころタルガの家

マナフィ「マナわかるっ海が荒れてるッぼくの故郷が壊れちゃう・・・」

その言葉は絶望される一言・・・そうマナフィは海の王子・・・海の危険を察知するのはよほど・・・いや大津波が起きる前兆であることを指した

そう・・・ミナミ達の命はない・・・その言葉を言い放った・・・それだけである

レル「・・・」

セメント「いやあ恐ろしい・・・レル様も恐ろしいけど・・・もっと恐ろしい」

レル「うるさいっアタシが恐ろしいだって!!アタシは超優しいよ」

セメント「いやいやレル様ポケモン以外いっつも怒ってますよ」
するとレルは噴火する

レル「だったらいつつも同じことを繰り返さなああああああいいい！！」

五秒後セメントが気絶したのは言うまでもない

タルガ「あのなあ・・・」

ため息とともに緊張感が走る

パネマ「怖いよ」

パネマは震えていた

ミナミ「なっ何この揺れ」

ナツヤ「気をつけるミナミ」

ルギア「ぎいいやあああう」

レッドアイ「ぐっ・・・」

ミナミ「レッドアイ！？」

レッドアイ「くっ・・・レンジャー・・・レル・セメント・ドガイ

に続いてブルーアイも頼む」

ミナミ「もちろんよ」

ブルーアイ「お前・・・シユ・・・反省・・・シユ・・・して・・・シユ・・・なかつ・・・シユシユシユ・・・たのか・・・」
もう死ぬのは確実だった

パープルアイ「ハツハツハツ！！さっきお前がつぶやいた三人組と
という言葉・・・奴等を襲ったのはそう・・・この私だ」
今ここでしゃべった・・・三悪を黒幕以外コケにする視聴者から恨
まれるということを知らないのか？つまり主人公のように否定され
る値にあることを知ってかしらずかルギアを操る

ブルーアイ「シユシユシユ許さないシユシユシユ」
するとパープルアイは笑う

パープルアイ「ハツハツハ！！ここで命を落とす・・・ハハハハハ」

ミナミ「ふざけないでっルギアのキャプチャはアタシよナツヤは・・・
ブルーアイを」

ナツヤ「ああ」

二手に分かれた

パープルアイ「フルギアをキャプチャすると！？それは不可能だ」
ミナミ「できるわよっキャプチャ・オン」
周りにラインが引かれる

パープルアイ「エアロプラスト」
ギユウバアアアッ
海に竜巻のような風が起き全員を吹き飛ばす・・・そして大津波が
起きる

ミナミ「きゃああーっ」

ここ一番高い所・・・そうレル達が壊した無線基地だった

パネマ「怖いよ津波がくるーっ」

レル「アーイツセメントなんとかするんだよ」

セメント「えー・・・なんとかと言われましても・・・人は自然に
は逆らえないのですよ」

レル「そうかい・・・ア・タ・シに逆らうんだ・・・へえーっ

津波を止める

ハジメ「サーナイトのテレポートで他の地方に住民を送った」

ヒトミ「アタシの出番ね」

するとヒトミの周りが光り始める

ヒトミ「テレポート！ハジメまさか・・・津波を・・・」

ハジメ「大丈夫だ太い七色ナインで弾き返してみるバトナージスタ
イラーなら・・・」

ヒトミ「何言ってるの！どうして一人で・・・」

ハジメ「サーナイト早く」

ヒトミから流れる涙

ヒトミ「ど・・・うして・・・ハジメ・・・一人で・・・なんで
ええええええ！！」

ハジメ「く・・・」

パシユウワアアアアン

上からふってきたヒトミ
ストン

ヒトミ「どうして・・・ハジメ」

レル「悲しむよりどいてー」

セメント「レル様重いですーうっうっ」

レル「スカポントン！！なあってえええ重いのはこの女だよ」

ドガイ「三人重いまんねん」

三人はヒトミのしたになっていた

ヒトミ「おおっと・・・」

レル「悲しいようだけど悲しいのはこっちだよ」

ミナミ「ここは……ろっや!?ハッ……ヒナタさんツカツ
キさんツ」

ナツヤ「く……ああッ先輩」

ミナミ「どうしてここに……」

ナツヤ「お前は……」

パープルアイ「目覚めましたか……レンジャー四人……あ
と二人いるそうですね」

ミナミ「何よまだ反省してないわけ?今週の反省会でナツパーズ三
人組とまじってなさいよ!!」

するとヒヤリと空気がただよった

パープルアイ「……」

ハジメ「(ディスクは……津波の中心に打ちつけ全体の統一を崩
津波を抑える……ただ……ディスク1つに……そこまで力
があるか……だ……おおっチャージ完了いつけええええ)」

津波のど真ん中に命中した

ハジメ「よしっパチリス電撃でディスクに力をあげて津波を……
ぱりいいいん

電気がためられた

ハジメ「あと……は……祈るんだ……助きたい……た
だ……それを……オブリアを……！」
ドドドドドドッ

津波に飲み込まれるハジメ

ハジメの父「ごはんを1人分ずつ渡すぞ」

ハジメの母「遠慮はいらないわよ」

ハジメの妹「ごはんが減っていく」

レル「おかづがないのかいせめて上にのっけるとか……」

もらいものに文句をつけるレル

セメント「ならからそうでからなくい少しからいラー油」

レルは飛んで喜んだ当たり前だこつちの世界でもなかなか手に入らないのだから

レル「天才だね秀才だねラー油くんだねえ」

突然おだてブタ「ラー油くんと怪物くん……かいかい……
いやラーイライライラーイライ愉快痛快ラー油くんは……
ラー油くんも木に登る」

三人「シビビンシビビンシビビン」

電撃放出！探せ仲間！インチキ商売！（前書き）

作者「感想ありがとうさとみさん」

セメント「きつとぼくちゃんが天才から感想が来たんだよ」

レル「スカポンタン！！それはアタシが美しいからだよ」

作者「どっちも違うと思う」

二人「ガーーーン」

電撃放出！探せ仲間！インチキ商売！

ミナミ「じゃあヒナタさんは・・・ヒードランの攻撃を受けてしまったのですね」

ヒナタ「ええッ・・・ごめんなさい」

ミナミ「そんな・・・」

カツキ「・・・ヒナタプラスルまだ動けるか？」

ヒナタ「え・・・ええ」

カツキ「考えがある」

するとカツキはヒナタに近づいた・・・どうやら作戦を考えてるらしい

ダズル「ヒトミィ!!」

ヒトミ「ダズルッ・・・」

ダズル「アルミアのポケモン達に異変が・・・」

大慌てのダズル

ヒトミ「落ち着いてダズル……」

ダズル「ハアハア……とにかくビエンに来てみる」

ヒトミ「なっ……」

ダズル「ポケモンは大暴れ……このままだと……森が……」

すると炎が燃え盛りビエンが火事になった

ダズル「いわんこっちゃんない！！カメックスを探すぞ」

レル「カメックスって本当にお金になるのかい？」

セメント「ええ確実ですよ今ナツパーズは解散した今スカポントンなエリート達を見返すんですから」

レル「そんなこと言ってうまくいったこと……30年で1回もなかったじゃないか」

セメント「そんなツ……大丈夫ですって……最近よく運が周っているのですから」

ドガイ「いっつも受け流されてるような気がするまんねん」

セメント「スカンプラン!!とにかくレル様キャプチャを……」

するとディスクが出されキャプチャに成功した

レル「これでは……」

セメント「売ればかなりの効果に……色づけして色違いポケモンとみなしましょう」

するとレルが悪の微笑みをもらった

レル「インチキ商売……というわけだねえ……最高の考えだよ」

「トトミ」どつして……カメックスがないの!?!?

ダズル「いろんな色のペンキがポツポツ落ちてる……」

ヒトミ「本当……あれこれって……ラティアスとラティオスの羽だわ」

ダズル「うーん……なんか……あやしいな……」

悩むダズルしかし悩んでるヒマはなかった……火事は自分達の所まで迫ってきた……そして戻れない状況に置かれた

ダズル「ハアハアまずい……川辺から……フローゼルで行こう」

ヒトミ「それしか……ないようね」

するとファイエンスタイラーをフローゼルに向けるヒトミ

ヒトミ「キャプチャ・オン」

レル「うまくいったねえ……これ売ればフッフッフッ」

セメント「これで見返せる……きつと神様は私達に味方してくれたのよ私達ががんばってるんだから」

レル「読者や視聴者も味方なんだから完璧だねえ」

ドガイ「と……いうわけで」

セメント「次回からガイコドロンアクダオジャマミレンクリンニ
束花のデカという番組が始まるのよ」

レル「タイムボカンシリーズの三悪のチーム名の頭文字をムリヤリ
つなげたねお前……」

ドガイ「センスないやなあー」

セメント「なんだって!!」

あまりにも上空でワイワイするもので上を売る者が後を絶たなかった

レル「スカポントン!!人に見られまくってるよさっさと行くよ」

ダズル「ビエンが……」

ヒトミ「とにかく……ユニオンに向かおう……シンバラ教授
なら……いい考えが浮かぶかもしれない……そうだ……ハ
ジメに連絡しよう……ボイスメールボイスメール!!……ハ
ジメ!?ハジメ!?まさか……ハジメえええええ!!」

ハジメ「く……………」

ミナミ「ハジメさん」

ナツヤ「大丈夫ですか？」

ハジメ「どうやら…………オレも捕まったらしい……………」

ミナミ「無事でなにより……………」

するとハジメが周りを見渡し

ハジメ「先輩達は何をやってるんだ？」

ミナミ「さあ……………」

ピカアッ

ヒナタ「そのまま放電」

カヅキ「電撃をためつづける充電」

ピカアアアアアッ

ヒナタ「充電」

カヅキ「放電」

バチイイイイイ

ヒナタ「がんばって…………後少しよ」

すると三人が駆け寄った

ナツヤ「何をしてるんですか？」

カツキ「磁力でここにあるシステムを破壊して……ここから抜け出しパールアイの勝負に挑み野望を打ち砕くんだ……ここにポケモンをおかしくさせる電波も流れてる……充電」

ミナミ「ならウクレレ！アナタも……充電」

ハジメ「ならパチリスお前も頼む……ムツクルからパートナー変えて正解だった」

リズミ「ヒナタさんカツキさんハジメそしてミナミさんナツヤさんのスタイラー信号がありません……もしかしたら」

ダズル「ぐっ……くそッ」

ヒトミ「ハジメ……」

するとパチリスが悲しそうな目でヒトミを見つめていた……パチリスも心配していた

ヒトミ「……アタシが……探しに行く……ハジメを……かわいいう後輩達を……あこがれ先輩を……」

ダズル「正気かヒトミー!!」

ヒトミ「ダズル・・・アルミアはまかせたわ・・・」

するとヒトミは走り出した

ダズル「ヒトミッ」

しかしダズルが外に出たとき・・・ヒトミの姿はなかった・・・
どうやらヒトミはあらかじめムクホークをキャプチャしてたらしい

ダズル「どうして・・・お前はすべてを1人で・・・何故!!」

レル「なーーんかヤバイねえ」

女性「アナタ達がカメックスを連れてきたからビエンの森はもう・・・
・終りよ」

男性「なんてことしてくれたんだ!!レンジャー達をバカにしている
のか!？」

レル「セメントくだからアタシはこんなの賛成できなかったんだよ
ーー!!」

セメント「でもレル様だってインチキ商売になるとテンション上が

ったではないですかーッ」

口論している二人をよそにドガイは必死に住民達を抑えていた

ドガイ「すみませんすみませんおさえて」

女性「どこさわってるのよスケベ!!」

ドガッ

ドガイ「あー・・・やっぱり女は怖いまんねん」

マナフィ「お姉様あ」

シエイミ「・・・」

ポケモンは茫然としていた・・・通常こんな顔するポケモンは見ただこと聞いたこともない・・・ポケモンにこんな顔をさせることはなさないだろう・・・よほどにスカポンタンである

カヅキ「よしっ・・・これで」

パープルアイ「エネルギー補給ありがとうございます」

ミナミ「ええッ」

パープルアイ「確かアナタ達がやっていたのは充電と……放電かな？」

ヒナタ「どうしてそれを……」

パープルアイは笑った

パープルアイ「電撃を放つ時の音は壮大です……からね……そして他にも言っておきましょう……それを見逃さないはず……しかし逆にいい補給源になったのです……愚かな」

オロカブ「オロカ……ブ」

パープルアイの横につくオロカブ

ミナミ「なっ……生意気よ！！このカブって」

ナツヤ「なんでそんなことに突っ込むんだ」

ミナミ「ナツパーズ三人組の影響よ」

パープルアイ「ベトベトン！！ダストシュート」

ドシューウウウウウン

高威力な技が5人の前で爆発した……

ヒトミ「ハアハアハア・・・手がかりに・・・なるものは・・・な
いの・・・？・・・気持ち・・・ハツ・・・気持ちを通じ合
える・・・マナフィ・・・ムクホーク！戻って・・・三人組を・・・
探して」

警察署

メトロ「・・・似たような奴等が捕まったもんだ」

レル「あーあ結局こうなるのねアタシ達は」

セメント「ここに入るとしばらく出番がなさそうね」

ドガイ「アクセスが下がるまんねん」

ヒトミ「どこにいるの・・・あちこち探したのに・・・どうして」

その場に座り込んだ精神的にも体力的にも限界に来ていた

ヒトミ「ハアハアハア・・・ハジメ・・・どこに・・・いるの・・・」

マナフィの病気（前書き）

ヒトミ「アタシさとみさんにホメられちゃたわ」

作者「でも書いてるのは・・・ウチなんですけど・・・」

レル「でもアタシだってワンポイントじゃないか？」

作者「アナタはオチで人気あるのよがんばってなさーいーい」

レル「ちつよと」

である

ヒトミ「ハッ・・・気をつけて」
ドガアアアアン

パチリス「チパアアアッ」

ヒトミ「こ・・・この技は・・・シャドーパンチ!?!?!?!?!」

するとヒトミの影にゲンガーが現われた

ヒトミ「くっ・・・キャプチャ・オンッ」

するとヒトミは腕をつかまれる

ヒトミ「ハッ・・・ゴースト」

するとゴーストはヒトミに呪いをかけた

ヒトミ「ぐぐっ・・・」

そのまま倒れるヒトミ

レル「あっ・・・おい大丈夫かい?」

ミナミ「ぐ…………う…………」

ナツヤ「ハア…………ハア」

ハジメ「ぐ…………くそ」

ヒナタ「…………うう」

カヅキ「パープル…………アイ」

するとパープルアイは微笑んだ

パープルアイ「そろそろ終りが近づきましたね…………レンジャーさん達…………エドワードのようなバカではないのだから…………」

ミナミ「…………もしかして…………ミュウツウの調子がくるったのも…………アナタのせい？」

パープルアイ「ハツハツハツ…………いまさら気づいても…………遅い…………」

ミナミ「キャプチャ・オンッ」

チリス!!」

カツキ「マイナン放電」

パープルアイ「破壊光線」

ヒナタ「カツキ!」

ドオオオオオオオオオオ

爆音とともに放たれる技……

ヒナタ「カツキイイイツ」

ナツヤ「先輩……よくも……よくもおおおおッキャプ
チャ・オン」

パープルアイ「無駄だ破壊……」

????A「ハイドロカノン」

????B「ブラストバーン」

放たれる2つの技

ミナミ「く……ブルーアイ……レッドアイ」

レッドアイ「……パープルアイ……お前は何も感じなかったのか？レンジャーの眼差しを……」

ブルーアイ「あんなキラキラされてる……「光の軌跡」の力を持つレンジャーに心を打たれなかった……アナタはどうかしてる……ただアタシお金さえ手に入ればよかったんだよ……まさか……こんなにポケモンがいるしむなんて思わなかったわ」

パープルアイ「ぐっ……破壊……」

ヒナタ「させないわプラスル……雷!!」

ドオオオオオオオオオオオオオオオオオオ

ヒトミ「ハアハアハア・・・まさかゴースまでいるなんて・・・呪いをかけられた今・・・体力がもってあと・・・そう・・・ね16分・・・パチリス!!!誘惑」
ポワアアアアン

ヒトミは自分のことで焦っていたのではなかった・・・マナフィがもってあと10分だと知ってるからである・・・

レル「セメント!!!なんとかおしよー」

セメント「レル様ったらすぐ私に頼るんだから・・・アナタは頼り癖があるのでは?ドラえもんでも」

するとレルがものすごく怒り出した

レル「その話をするんじゃないよ!!!」

ヒトミ「・・・行くわよッパワーチャージ・・・パチリス時間を稼いで!!!電磁波!!!」
パライイイイン

ヒトミ「よっっ・・・」

するとレルの表情が変わる・・・いくら素人でも明らかにポケモンの様子がおかしいからである

ヒトミ「もつても・・・8分・・・いや・・・5分・・・なん
とかしないと・・・キャプチャ・オン」

かるやかにゴースとゴーストのキャプチャに成功する

セメント「ゴースと!?!」

作者「殺しますよ・・・ギャグじゃないし・・・殺されたい
?」

セメント「い・・・いえ」

レル「殺してもいいよ」

作者「了解」

セメント「ぎゃーーーーーッ!」

ヒトミ「ダメ・・・ゲンガのキャプチャなんてできない・・・
・影を出入りしてる・・・パチリスフラッシュ」
パアアアアッ

ヒトミ「キャプチャ・オン」

ラインが引かれキャプチャを試みるも・・・

ゲンガー「ガアアアアッ」

シャドーボール・・・シャドーの塊の攻撃

ヒトミ「くああっう……ハアハア……ゴースシャドーボ
ール」

ドドドドド

ヒトミ「今ねキャプチャ・オン」

ラインが引かれ成功した

レル「やったねえ……さすがレンジャー……まったくうちの
スカポンタンときたら……」

セメント「ヒドイねえ……レル様は」

レル「ヒドイのは……ハツマナフィー!」

ヒトミ「近くのタルガさんの家へ」

レル「……………」

ミナミ「ぐ……う？ここは……ナツヤ！？先輩！？……
……どこッ……ウクレレフラッシュよ……あれウクレ
レ？どこー！？」

パープルアイ「フッフッ……」

ミナミ「あなたは……みんなを……」

パープルアイ「この暗闇の空間に疑問をもたないなんて……不
思議なお人」

ミナミ「！？」

パープルアイ「……ミカルドからの借り物……ダークライの
悪夢の中です……」

ミナミ「！！」

ヒトミ「元気になった……後は……協力を……」

悪夢の渦（前書き）

ミナミ「さとみさん・・・ホメすぎ・・・」

レル「アタシ達褒められてないような気がするよ・・・多分このスカポンタンがいけなんだね」

セメント「ヒドイわレル様・・・私女子高生にモテるのよ」

レル「嘘はおよしよ!」

セメント「信じて私・・・もうレル様しかいないの」

レル「結局嘘じゃないか!」

悪夢の渦

ミナミ「悪夢……」

この暗闇は悪夢と言えるだろう……。この空間にはパープルアイとダークライとミナミしかないのは確実に二人の周りはとても薄い白いベールのようなものに包まれている

ミナミ「アタシをこんな所にほうりこんで……。なにするつもりよ！？」

パープルアイ「私と……。くまないか？」

ミナミ「なんですって！？そんなのアタシが簡単に……」

パープルアイ「オブリアが……。どうなってもいいのですか？」

ミナミ「ハッ……。くっ……。パープルアイ……」

パープルアイ「さて……。私とくみますかね？」

あらためてゆっくり言うパープルアイ

ミナミ「……。わかったわ」

ミナミは少しくやしそつに言う

その頃

ナツヤ「ダメだミナミ!! やめるんだ」

ヒナタ「ナイトメア・・・おそろしい力だわ」

カヅキ「悪夢を見せるだけじゃなくて幻覚を見せたり・・・夢に入り込んだり・・・」

ハジメ「石の力を使ってもあなる・・・暗闇・・・いや暗黒に支配されてる・・・まるで闇のダーククライ」

レル「そんなことはマナフィは出来ないよ!!!・・・マナフィが位置を知らないと・・・つなげることなんて・・・」

ヒトミ「……じゃあ……」

ナツパーズA「ここにいたな……やれ」

するとヒトミとナツパーズ三人組を捕らえた

レル「お前たちツアタシより下のランクだろ!!放すんだよ!!」

セメント「あらかわいいナツパーズちゃんやめて!」

ナツパーズB「いやよ」

レル「スカポントン!!お前達……一体どうしたっていうんだい!!ブルーアイやレッドアイ様はナツパーズをやめてるんだよ!!エドワードだって……アタシ達より慕える相手は一体誰だって言うんだい!?!」

パープルアイ「では……無線基地を守ってください……無謀なレンジャーから」

ミナミ「はい」

完璧に洗脳させられるミナミ

ナツヤ「くっ……」

ヒトミ「なっ……どこにつれていく……ハッ……みんな」

ナツヤ「先輩ッ」

ハジメ「ヒトミ」

ヒナタ「ナツパーズ三人組まで!？」

レル「パープルアイ!……そうか……こいつ等が動いたのは……お前が指示していたから!……レッドアイ様は……ナツパーズをやめてるのに……どういことだい!!」

セメント「女子高校につれてってもらえたらうれしかったのに」

ドガイ「お前はそんな頭しかないんやか!?!?!?!?! どうせならた
らく食べれるレストランが良かったまんねん」

セメント「ドガイだって同じだろツ!」

レル「スカポントン!?!?!?!?! なにやってるんだよ!?!?!?!?! スカポントン中の
スカポントンだよお前達は!?!?!?!?!」

セメント「まあヒドイ私わね...メカ作りの天才なのよ?それは
スカポントンって...どうかしてるわ...なにより1番スカ
ポントンなのは...そうパープルアイよ」

レル「そーだねーいままでブルーアイよりアタシ達をコケにして
くれた恨み...許さないよ」

パープルアイ「お前達のアホな漫才楽しかったぞ」

セメント「え?」 ボケ

ドガイ「漫才?」 ボケ

レル「スカポントン!?!?!?!?! バカにされてるんだよ!?!?!?!?! それはお前達
がスカポントンだから」 ツッコミ

セメント「あらボケとツッコミの表示が...」 スカポントン

レル「スカポントン!?!?!?!?! お前表示がスカポントンだよ」

ドガイ「作者に遊ばれてるまんねん」 スカポントン

どうやらこの三人緊張感がないらしい・・・30年以上負けつづけてるため負けがわかっておりあきらめから緊張感がなくなったらしいポケモンは相変わらぬため息を吐いた

パープルアイ「ハツハツハツ・・・漫才は最高だな・・・ただ・・・これでお目にかかれるのも最後だ」

するとダークライがダークホールを三人にぶつけようとする

カヅキ「まずいッマイナン放電」
バチイイイイイン

パープルアイ「悪の波動」
ドガアアアアアアン

カヅキ「ぐうあああッ」

ヒナタ「カヅキ！マイナン」

パープルアイ「シャドーボール」
ドドドン

ヒナタ「きゃあああ」

レル「あーアタシ達はスカポントンだっということだよおおおなんとかおしよーセメント！なんとかしてくれたら・・・」

セメント「くれたら・・・」

レル「何がいい？」

するとセメントが気持ち悪い笑いを見せた

セメント「うーん迷うなあ……レル様のお着替えでも……これは小説だから大丈夫だね……でも最近30年前と違って厳しいものねえ……でも……うーん……あっ……レル様とこのお口とお口で……いや……もつとすばらしいのが……結婚とか」

レル「いいよ……まあお前の力でなんかしてくれたら……ねえ」

セメント「がんばりますッはい」

ヒナタ「ちょっとアタシ達の仕事なの……よ」

レッドアイ「レンジャー達に……まかせるしか……ないんだわかってくれ」

レルの目つきが変わった

レル「はい レッドアイ様」

セメント「ああー……ヒドイお人ねやっぱりレル様は」

ドガイ「やっぱりセメントはスカポントンやなあ」

セメント「なんだって！？私が！？同じスカポントンに言われたくないよッ」

ミナミを助ける(前書き)

新キャラ登場

ミナミを助ける

ヒナタ「アナタの思い通りにはさせないわ！トップレンジャーと呼ばれるみんながやるんだから！行くわよ」

口上を始めた

レル「主役の口上は嫌いなよね・・・」

セメント「あきやすいし」

ドガイ「インパクトないし・・・」

カツキ「レンジャーの呼べば」

ヒナタ「どこへだって飛んでいく」

ハジメ「困ってるポケモンや人がいれば」

ヒトミ「すぐに助けに行きますよ」

ナツヤ「第9代のヒーローは」

ヒナタ「ポケモンレンジャー6人よ」 ミナミ分

レル「まるでタイムボカンシリーズの主人公の口上だね・・・しかも第9代って・・・あっ・・・タイムボカンシリーズ8作あった・・・ヤッターマンを除くと・・・まさかッ・・・」

ヒナタ「パープルアイ！絶対まけないわよ」

パープルアイ「ミナミよツ力を見せてやれ」

ミナミ「はい・・・ウクレレ雷」

ヒナタ「プラスル雷」

ぶつかり合う電撃

セメント「あらーまぶしいわよ」

ヒナタ「消えた！？どうして・・・」

カツキ「逃げ出したか・・・電撃の光を利用して」

ハジメ「でも・・・もう追う力なんてありませんよ・・・
ハア」

ナツヤ「あれ・・・ブルーアイやレッドアイ・・・三人組がいな
い」

カツキ「確かになでも・・・今回は引こう」

ヒナタ「シンバラ教授・・・とてもではないですけど・・・私達
力では・・・およびません」

シンバラ「・・・」

ハーブ「パープルアイが・・・」

ダズル「ヒトミ・・・ハジメ無事だったのか」

セブン「パープルアイは噴火を覚えたヒードランやルギアなどを操
りミュウを探そうとしている・・・ルギアの力で・・・オブリア
は津波に襲われた・・・ただ弱い津波だったというのに・・・ハジ
メが流された・・・そしてダークライに洗脳されたミナミ・・・
うーむ・・・何を考えているんだ？」

ヒトミ「後・・・ナツバース三人組を含め・・・幹部のレッドアイ
達も連れさらわれてしまったの・・・どうやら・・・アタシ
の出番ね」

シンバラ「余計なことを言うな！お前らがそうじゃから・・・」

「????これはこれはシンバラ教授お元気ですか？」

とてもスタイルがいい美しい美少女・・・13歳といったところの・・・女の子の影

シンバラ「キミは・・・ユカリちゃん」

ユカリ「こんにちは・・・トップレンジャーの皆さん」

シンバラ「ユカリちゃんは凄腕トレーナーで四天王のシロナにも勝利した・・・他にもダイゴやワタル・・・最近ではミクリにも勝った超有名トレーナーじゃ」

ヒトミ「トレーナーが何かご用？わかったアタシの実力が・・・」

シンバラ「クラスは1じゃがレンジャーじゃ」

ユカリ「トレーナーとしての実力が高いです・・・から相性や強さはお任せください」

するとモンスターボールを取り出した・・・始めて見る物体に興味津々のレンジャー達

ユカリ「あと・・・ナツバーズ三人組のリーダーレルのことなら知ってますよ」

ナツヤ「ほっ・・・本当かい？」

ユカリ「はい昔あの方は・・・四天王のチャンピオン・・・四天王をしのぐほどだったんですが・・・ビンボーな暮らしが続き・・・

」

ヒナタ「も……もう言わなくてもいいわ」

やや焦り気味のヒナタ

ユカリ「でも……私はあの人にかいませんでした……レルは最初からわ……悪いというか……あはは……」

ヒナタ「も……もういいって!!」

やや強く言ってしまった

シンバラ「何やつとるヒナタア!!助っ人じゃぞ」

ヒナタ「す……助っ人!?!」

ヒトミ「ヒナタ先輩わかりましたよ」「こんな若いし頼りなさそうでクラス1のレンジャーが助っ人なんてただの足手まといね」と言うことですよ」

シンバラ「本当か!」

怖い目つきでシンバラ教授ににらまれた

ヒナタ「ち……違いますよー……ってヒトミイイイイイイイイ!!」

ヒトミ「きゃああごめんなさいッ……」

ナツヤ「もういい加減しろよ!!!!」

ナツヤの一声であっというまにあたりは静かになった・・・シーンと音も立たない・・・

ナツヤ「心配じゃないのかよ!?!ミナミのことが!?!」

一方こちら

レル「ハア・・・なんでアタシ達が捕まらないといけないんだよー
ーッ」

セメント「私達は悲しい運命を背負い・・・」

ドガイ「悪い事しながら生きていくまんねん」

セメント「好きなこと好きなこと悪い事」

ドガイ「タイムボカンをぶつとばし」

レル「それいけそれけガイコッツ」

三人「ツンツンガーイーコッツ」

レル「何「それいけガイコッツ」歌ってるんだよ!?!」

すると三人の姿がマージヨ一味に変わった

グロツキー「パワーアップですよ」

ワルサー「そつやそつや」

マージヨ「名前も変更してるじゃないか!」

グロツキー「いやですか?ではドロンボー一味に・・・」

マージヨ「もーいいもーいい!いいからさっさとお戻しよ!」

グロツキー「しばらくこれで行きましょう」

マージヨ「嫌だよ!」

三人の姿がドロンボー一味へと変わる

ボヤツキー「ならこれは?人気高いですよー」

ドロンジヨ「そつという問題じゃないよ!」

トンスラー「どつという問題?」

ドロンジヨ「スカポンター!」

ユカリ「まずはポケモン達の紹介ですね・・・はいットゲキッスとブラッキーとフリーザーとウインディとカメックスとムクホークよ」

ヒナタ「すごいッ・・・フリーザー？」

ユカリ「はい最近捕まえたんです」

ナツヤ「やっぱり・・・どこで捕まえたの？」

ユカリ「カントーです」

ナツヤ「なっ・・・」

ユカリ「そして・・・ふたご島で見たんですけど・・・おかしいのです・・・カイリユールとバンギラスが今した」

するとヒトミがピンと来た

ヒトミ「アタシ昔グレンに住んでたの・・・まさか・・・」

・ふたご島に急いで・・・おかしいわ

焦るト下ミ・・・周りに・・・緊張感が・・・走った

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5310/>

ポケモンレンジャー物語 2

2010年10月13日00時28分発行